

後漢墓出土の金銅仏とその意義

— 考古学資料からみる 2～3 世紀の中国初期仏教 —

黄 盼

1. はじめに

中国における最古の仏像造形は 2 世紀初に遡る。例えば青銅揺錢樹に現れた仏像紋様があげられる。このような仏像は礼拜対象ではなく、装飾性が強い。一方、少し遅れると、礼拜対象として認識された単独の金銅仏が現れた。その中で最古の紀年を持つものはサンフランシスコアジア美術館蔵後趙建武四年（338）金銅仏坐像である。また、後趙像と類似した造形をもつ高さ 10cm くらいの小さな金銅坐仏も多く発見されている。建武四年像を基準として、このような初期金銅仏を十六国時代の製品と判断するのが一般的である。しかし、初期金銅仏は考古学的に発掘されたものが少なく、紀年銘をもつものも少なく、また偽造品が多いため、具体的な年代については判断が難しい。2021 年、咸陽成任墓地から二つの金銅仏が出土し、初期金銅仏の研究に新しい材料を提供した。後漢墓から仏像が出土した例が他にないわけではないが、いずれも仏像の年代に関しては諸説ある。本稿では改めて仏像の出土状況を整理し、金銅仏の造形や制作技法、および歴史的な意義を考察することにした。

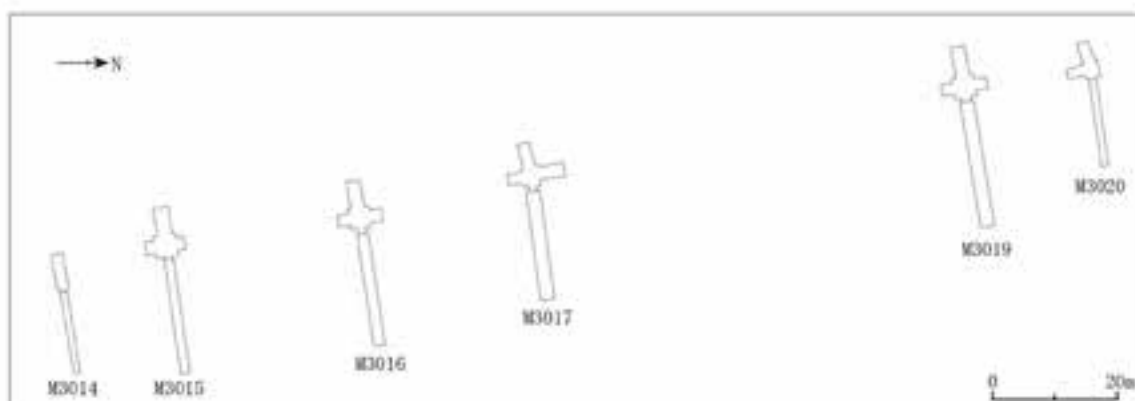
2. 墓の概要

金銅仏が出土した後漢墓は 2 例がある。以下では、この二つの墓の状況を確認していこう。

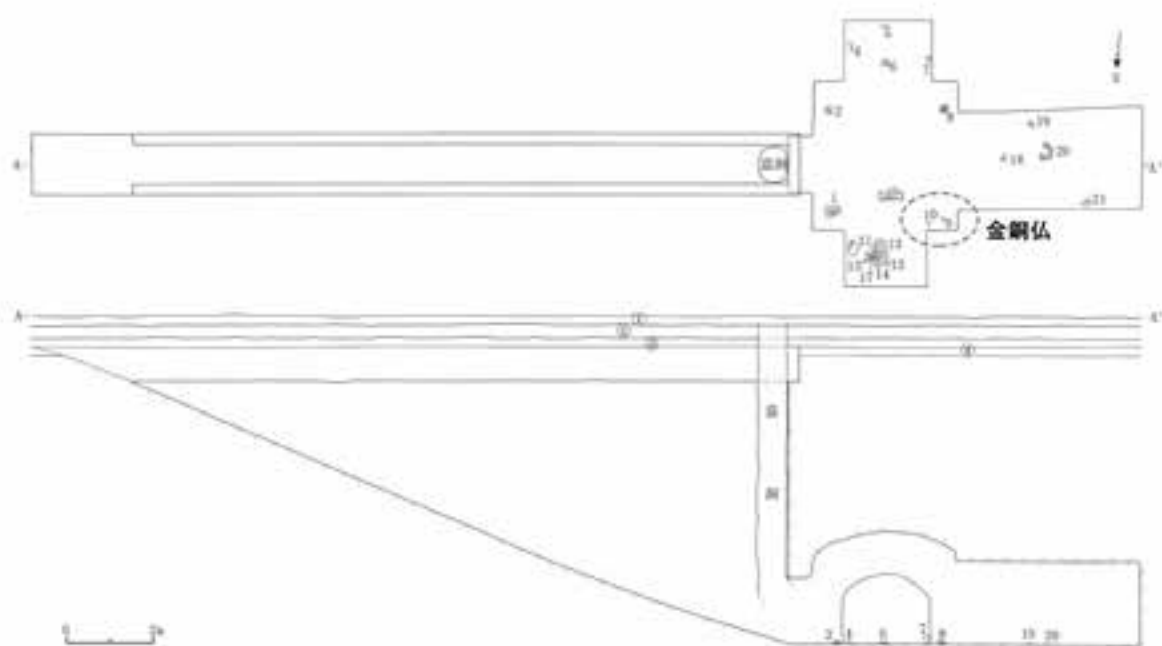
（1）陝西省咸陽市成任墓地 3015 号墓

2021 年、陝西省咸陽市渭城区北杜街道成任村の東南で、漢から唐時代の多数の墓葬が発掘された。そのうち M3014～M3020 が約 15 m 間隔で並列し、いずれも東に墓道を設けている。それらの構造や副葬品は類似した特徴を持つことから、一つの家族墓地に属すると推測された（図 1-①）（陝西省考古研究院 2022）。そのうち、M3019 から出土した陶罐には「延熹元年（159）」、「桃氏之家」などの銘文が記されていて、墓地の年代と被葬者の出自を示す重要な証拠となる。

M3015 からは二体の金銅仏が出土した。M3015 は洞室墓であり、東から墓道、羨道、前室（二つの側室を持つ）、後室によって構成されている（図 1-②）。全長 25.3 m、墓室長 8.05 m。仏像以外の副葬品は後漢時代の特徴が強く、また磨郭五銖が副葬され、魏五銖がないため、M3015 と M3019 との間に大きな時間差はなく、同じく 2 世紀後半から 3 世紀初に位置づけられる。層位的にみれば、M3015 は第③層の下に位置し、第④層とその下の地山を切っている。また、一つの盗掘坑が第①層の下で検出され、第②、③層および墓道の埋土を切って、墓道の末端から墓室まで掘り込まれている。第①層には現代の磚瓦破片、第②層には近代瓷器、磚の破片があるため、近現代の盗掘であることが明らかである。第③層と第④層は腐植土であり、二層ともに遺物はほぼない。墓は盗掘さ



①墓分布図



②M3015実測図

図1 成任墓地（陝西省考古研究院 2022）

れていたが、わずかに遺物が残存していた。仏像は前室西北隅の地面に置かれていた。後室には銅銭、鉄棺釘、木棺の痕跡が発見されたため、後室は棺室であることがわかる。棺室の中に銭を入れることは後漢墓によくみられる現象である。また、陶質明器の位置について、北側室には耳杯、勺、壺、罐など、南側室には陶豚、陶犬、前室中央には案がある。副葬品の位置には一定の規則性が認められるため、仏像は元の副葬位置から大きく移動していない可能性が高い。

（2）河北省石家庄市北宋村2号墓

1955年、河北省石家庄市東郊北宋村で二つの漢墓が発掘された。そのうち2号墓からは二体の金銅仏が出土した（河北省文物管理委員会 1959）。2号墓は多室磚墓で、南に墓道を設けている。墓室は通長 22.13 m、通幅 11.5 m、東西並列の二つの磚室によって構成されている。東磚室は南から、羨道、前室、中室、後室、西磚室は羨道、前一室、前二室、中室、後室によって構成されている（図2）。

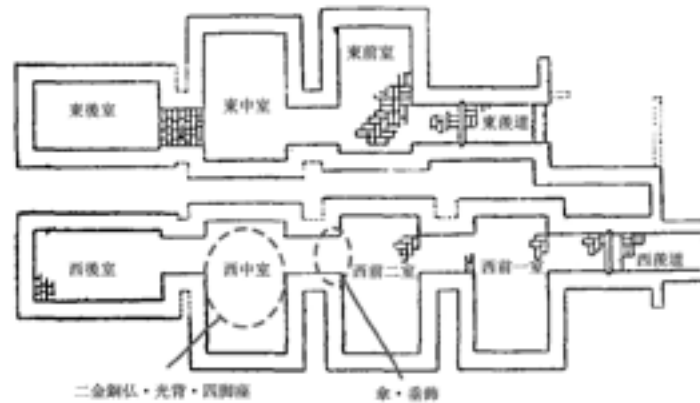


図2 北宋村2号墓（河北省文物管理委员会 1959）

墓は盗掘されており、墓底には1～1.5 mにわたって崩落した磚と泥土の堆積があった。遺物は墓底および散乱した磚の中から出土した。東後室から棺釘と人骨が発見されたため、後室は棺室であろう。西墓室の破壊はより激しく、人骨が前一室と羨道の間から発見された。西室の規模は東室より大きく、また車馬具や武器などが副葬され、西室墓主は男性の可能性が高い。大型の多室墓は後漢時代に流行し、また副葬された五銖銭の中には磨郭五銖が含まれていたため、この墓の時代は後漢晩期、すなわち2世紀後半～3世紀初であることがわかる。二体の仏像は西室から出土した。そのうち一体の仏像には光背、傘および四脚座がともなっている。具体的な出土位置をみると、西中室の床面から1 mほどの高さまで堆積した磚の中から二体の仏像の本体、光背、四脚座が出土し、西前二室の北門では床面から1.5 mの高さまで堆積した磚の中から傘とその装飾が出土した。仏像以外の副葬品は、後漢時代の特徴が顕著である。したがって、仏像だけが後世に混入した可能性は低い。また、このような大型磚室墓は後漢晩期の二千石階級の官吏に多く用いられる墓である（劉振東 2015）。例えば後漢靈帝光和五年（182）の河北望都2号漢墓（河北省文化局文物工作隊 1959）や、後漢靈帝熹平五年（176）の河北安平漢墓（河北省文物研究所 1987）などがあげられる。

以上、二つの墓の状況、および共伴遺物をあわせて考察すると、出土した金銅仏は後漢時代のものである可能性が高い。

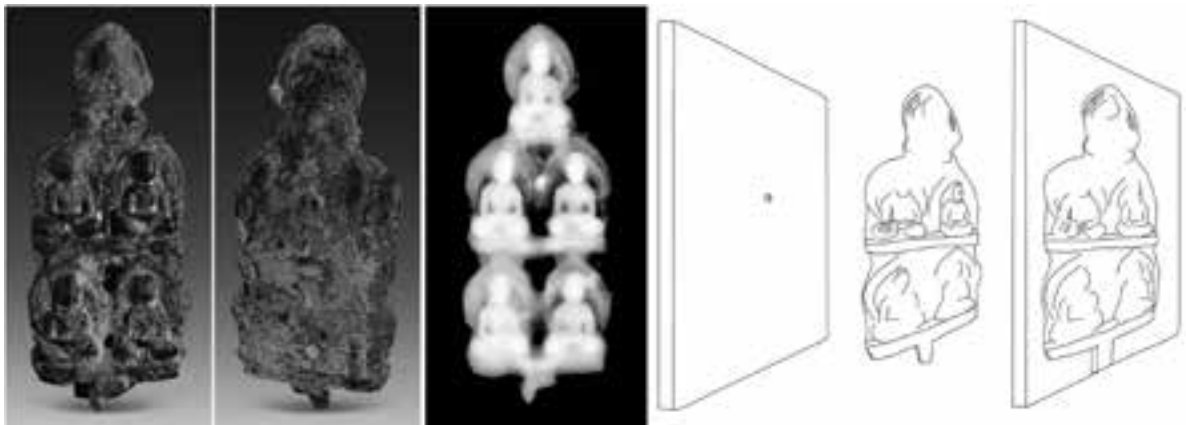
3. 出土金銅仏の造形と鑄造技法

（1）成任墓地 M3015 出土仏像

M3015:9 は通高約 15.8cm、幅 6.4cm をはかる。薄い板状を呈し、五つの坐仏を三段に分けて並べ、上段に一つ、下二段にはそれぞれ二つの坐仏が配置されている。全体の下部にはほぞ状の突起が部分的に残っている（図3-①）。坐仏は同じ造形を呈し、いずれも禪定印を結び、円形の頭光、宝珠形の火焰光背をつけ、短冊形の座具の上に結跏趺坐している。保存状態の良いところでは、手首にかけた衣が膝の上を覆うことや、そこに平行線状の衣紋があることなど、細部を確認できる。袈裟の纏い方は通肩であろう。背面はほぼ平らで、中央よりやや上に、一つの小さな突起がある。側面には合

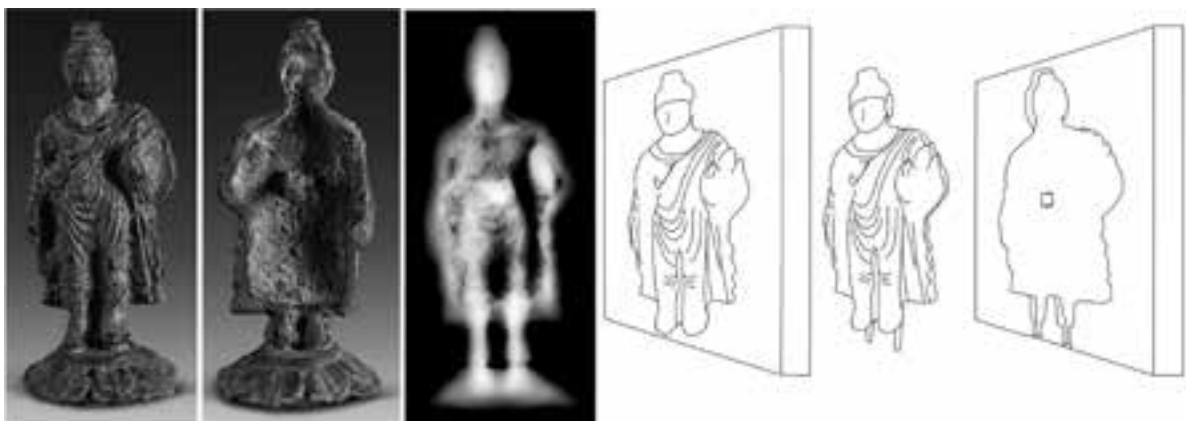
わせ型の痕跡が見える。また X 線写真から、坐仏の銅は厚く、光背は薄いことがわかる（図 3-②）。この仏像の鑄造方法は、2 枚の鑄型を合わせて、下のほぞ状のところを湯口として、そこから溶かした銅を注湯したものと考えられる（図 3-③）。錆のない部分の成分は銅 81.36%、錫 10.20%、鉛 8.44% である（李建西ほか 2022）。

M3015：10 は通高 10.5cm をはかる。仏立像は脚下のほぞによって、蓮台に差し込んでいる（図 4-①）。仏像は通肩の袈裟を纏い、左手を挙げ、衣端を持っている。右手は破損しているが、腕にかけた衣の形状からみて、もとは施無畏印であった可能性が高い。肩の衣紋は階段状を呈している。耳のあたりや体の側面には范線がみえ、合わせ型を使っていることがわかる。X 線写真によって、頭部や左手、腹部、足および蓮台の銅は厚く、他の部分は薄いことがわかる（図 4-②）。腹部の背面には長いほぞがある。蓮台には二つの穿孔があり、孔から観察すると蓮台は中空ではないことがわかる。この仏像の鑄造方法は 2 枚の鑄型を合わせて、脚下のほぞから、溶かした銅を注湯するものであろう（図 4-③）。仏像の表面は錆で覆われている。仏像左耳後方のサンプルの成分は銅 76.10%、錫 8.47%、鉛 15.43% であり、蓮台後のサンプルの成分は、銅 73.71%、錫 12.02%、鉛 14.26% で



①写真（陝西省考古研究院 2022） ②X 線写真（李建西ほか 2022） ③鑄造想定（筆者作成）

図 3 成任墓地 M 3 0 1 5 : 9



①写真（陝西省考古研究院 2022） ②X 線写真（李建西ほか 2022） ③鑄造想定（筆者作成）

図 4 成任墓地 M 3 0 1 5 : 1 0

ある（李建西ほか 2022）。

（2）北宋村 2 号墓出土仏像

出土した仏像は 2 点がある。簡報には番号がないため、ここでは四脚座、本尊の坐仏、光背、傘によって構成される仏像を 1 号と呼ぶ（図 5-①）、本尊の坐仏だけの仏像は 2 号とする（図 5-②）。

1 号仏像は通高 21.4cm。全体の金メッキはよく残る。本尊の両手は腹前で禪定印を結び、手の甲は前に向いてる。通肩に袈裟を纏い、左右対称の衣紋をあらわす。首元は円形の襟のような形状を呈し、胸元の衣紋は「U」型になっている。肩部の衣紋は M3015:10 と同じく階段状を呈している。獅子座の上に坐している。一對の獅子は正面にむき、やや突出している。鑄造の後に、手、襟、獅子、台座などの細部を線刻で表現する。例えば、襟の波紋、獅子の顔、獅子の間の蓮華、台座下縁の幾何紋などである。本尊は中空である。背面には二つのほぞがあり、一つが背中、もう一つが台座の上縁にある。宝珠形の光背は上部に設けた小孔を本尊背後のほぞに嵌めて、さらにほぞに傘を挿して光背を固定している。光背の上部には蓮台に坐した禪定坐仏がある。その下には二体の飛天があり、本尊の頭部両側に配置される。いずれも宝珠形の頭光をつけている。下部には二体の合掌比丘像があらわされ、本尊の両側に立っている。また光背の表面には蓮華や本尊の頭光などの線刻がある。また、本尊獅子座の下に四脚座をつけている。四脚座の上面には蓮弁紋の刻線を施し、他の面にはパルメット紋をあらわす。傘は丸く、中棒は垂直である。外縁には垂飾をかけている。2 号仏像は獅子座の上に坐している坐仏である。高 8.7cm をはかる。保存はよくないが、1 号の本尊と近似している。細部に区別があり、例えば手の細部や獅子の顔は線刻ではなく、鑄造されている。

このような造形の仏像は、現存例が多く、先行研究では主に五胡十六国期の仏像とされてきた。成分分析がなされたものは少ないものの、アメリカメトロポリタン美術館所蔵の 2 点の仏像とサンフランシスコアジア美術館所蔵の後趙建武四年像の成分分析の結果によって、いずれも銅・錫・鉛の合金であることがわかる（Donna Strahan2010）。これは中国伝統の青銅器の成分と同じである。仏像は



図 5 北宋村 2 号墓出土仏像

中空であるため、内範を使っていることがわかる。また中空の部分には土の内範が残された例もある（和泉市久保惣記念美術館 1988）。仏像は鑄造のあとに仕上げがなされたが、一部の仏像は側面に範線が残っているため、このような仏像は内範と2つの外範により構成された鑄型を用いて鑄造されたことが推定できる（図5-③）。また、メトロポリタン美術館所蔵の仏像はX線写真から、内範と外範の間に設けたスペーサーの痕跡が見える（図5-④）。

以上の検討をまとめると、中国初期金銅仏は中国伝統の青銅器と同じ成分によって鑄造され、中国伝統の合わせ型を使っている。内範の使用の有無によって二つの鑄造方法にわけられる。平面的な像は2つの鑄型を合わせる方法で、中空の仏像は内範を使う方法である。

4. 初期金銅仏の意義

以上では仏像の出土状況、造形や技法を分析した。以下では、それらの歴史的背景をふまえて、初期金銅仏の意義を考察することにした。

（1）中国初期金銅仏の源流

中国において仏教は外来の宗教である。後漢墓出土の禅定仏と立像の造形は、ガンダーラ地区に原型が求められる（図6）。ガンダーラ地区は東西交通の交差点であり、仏教彫刻が多く発見されている。イタリア隊がスワート地区での考古発掘によって、ガンダーラ地区では1世紀前半までに仏像が出現したことを証明した（Domenico Faccenna 1980）。また、中国初期仏教と深く関わるクシャーナ朝ではカニシカ王の貨幣に仏立像の造形が使用された。

一方、中国初期金銅仏の成分は中国伝統の青銅器の成分と同じであり、中国伝統の合わせ型を使っている。技術的に、中国では2つの鑄型を合わせる方法と内範を使う方法によって仏像を作る先例がある。それは青銅揺銭樹に現れた仏像である。揺銭樹とは、銭をつけた樹木をかたどった青銅製品で、四川地区を中心に発見される特殊な副葬品である（図7）。後漢代に出現し、三国蜀の時代まで使用

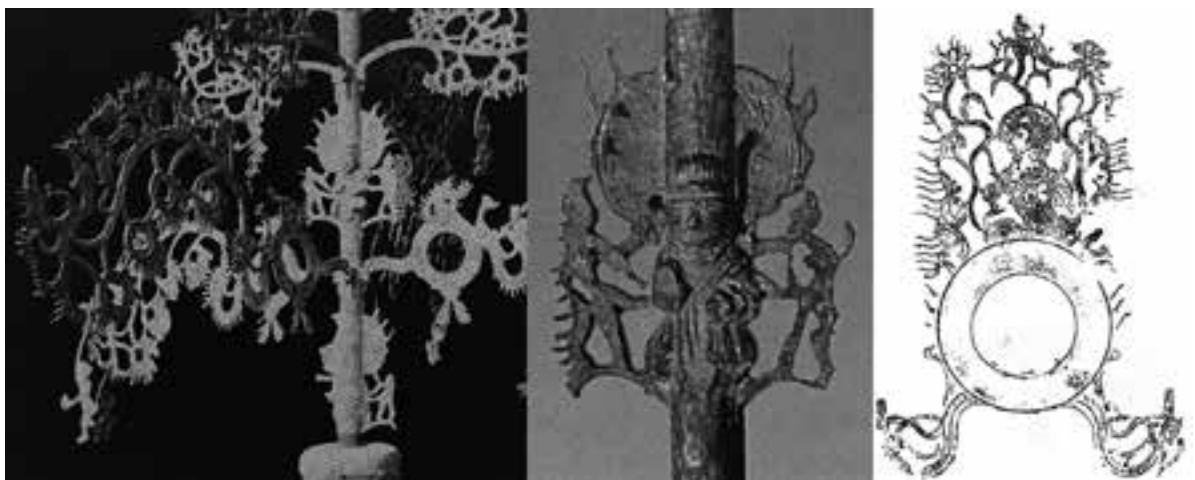


図6 ガンダーラ彫刻（田辺勝美ほか 1999）

された。そのうち、仏像青銅揺錢樹の破片が出土した重慶市豊都県槽房溝九号墓（M9）の一括遺物のなかに「延光四年（125）五月十日作」銘をもつ陶座がある（重慶市文物考古所ほか 2001）。そのため、この青銅揺錢樹の制作年代は 125 年前後であると判断できる。青銅揺錢樹では仏像が幹（図 7 - ①、②）や頂部（図 7 - ③）にあらわされ、それぞれ異なる鑄造技法を使っている。頂部の仏像は平面的な表現であるが、幹の部分は中空で、中に内范を入れる必要がある。すなわち 2 世紀初めの中国では、この二つの技法によって仏像を造形していた。特に、陝西省では仏像揺錢樹の出土例と初期金銅仏の出土例があり、地域上の接点がある。揺錢樹仏像の造形は類似し、いずれも鼻筋は高く、目はまるく、口元の両側にはまるくはねあがる八字形の髭があらわされている。片手を挙げ施無畏印を結び、片手が衣端を握り、結跏趺坐する。着衣の表現はわずかな区別がある。胸元には斜め方向の衣紋線があって、袈裟下縁は弧状を呈する例がある。通肩式の着衣としてきわめて不自然な表現となっている。また、首には円形の襟のように表現する例もある。胡人風の強い面相は初期金銅仏と異なるが、首元にあらわされた円形の襟状衣紋表現は金銅仏にも見られる。すなわち中国初期金銅仏は中国の工匠が外来の原型のもとに作ったものであり、中国の伝統的な造形も部分的に継承された。仏像の姿体や着衣表現は 2 世紀初の揺錢樹仏像より厳密になっているが、容貌はより漢化されていた。

（2）後漢墓に現れた仏教要素

後漢時代には、墓の中に仏像が現れた。揺錢樹仏像のような副葬品を装飾する仏像以外に、四川省樂山市の崖墓墓室の入口の門楣に彫刻された仏像もあげられる（唐長寿 1987）。一方、仏像以外の仏教的な要素も墓の中に現れた。内モンゴル和林格爾後漢壁画墓の壁画には「仙人騎白象」を榜題にする象に乗る人物の図像や、「捨猊」を榜題とする皿の上に四つの球状のものを置いた図像がある（俞偉超 1980）。和林格爾壁画墓は磚室墓で、墓室の長さ 19.85m、東から羨道、前室（二つの側室を持つ）、中室（一つの側室を持つ）、後室によって構成されている（蓋山林 1977）。また、山東省沂南画像石墓では東王公・西王母に対応する位置に、頭光をともなう立像が配置されていた。この墓の墓



①青銅揺錢樹の部分

②幹の仏像

③頂部の仏像

図 7 安県出土青銅揺錢樹（何志国 2007）

室は東西 7.55m、南北 8.7m、南から前室（二つの側室を持つ）、中室（三つの側室を持つ）、後室によって構成されている（曾昭燏ほか 1956）。この二つの墓は規模と装飾の特徴から北宋村 2 号墓と同じ二千石階級の官吏の墓と推定できる（劉振東 2015）。

階級が少し下がると、湖北省襄樊菜越 1 号墓が挙げられる。襄樊菜越 1 号墓からは、頂部に七層の円盤をつらねた二重楼阁を中心とする陶製楼阁明器が出土した（襄樊市文物考古研究所 2013）。その外形は文献史料に記載された笮融建立の浮図祠と一致し、仏教要素をあらわした明器として注目されてきた。墓は南から、墓道、羨道、前室、過道、後室によって構成されている（図 8）。墓室全長 13.14 m、後室のなかには 2 人が埋葬され、西側が男性、東側が女性である。墓道と墓門には 2 回封鎖した痕跡があるため、2 人の被葬者の埋葬に時期差が存在することはまちがいない。また、床面敷磚の構築方法をみれば東側の女性の埋葬が西側の男性よりおくれることが明らかである。浮図祠は西棺の手前から出土しており、1 回目の埋葬に属するものである。副葬時期は 2 世紀後半から 3 世紀初の可能性がある（黄盼 2019）。時代は少し下るが、三国時代の鄂城塘角頭 4 号墓からは釉陶仏像が出土した（湖北省文物考古研究所ほか 1996）。鄂城塘角頭 4 号墓は墓室長 8.72m、前室と主室を

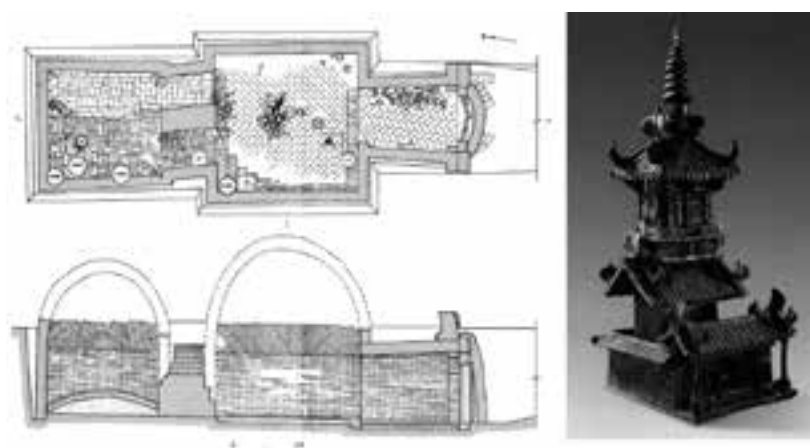


図 8 襄樊菜越 1 号墓と陶製楼阁明器（襄樊市文物考古研究所 2013）

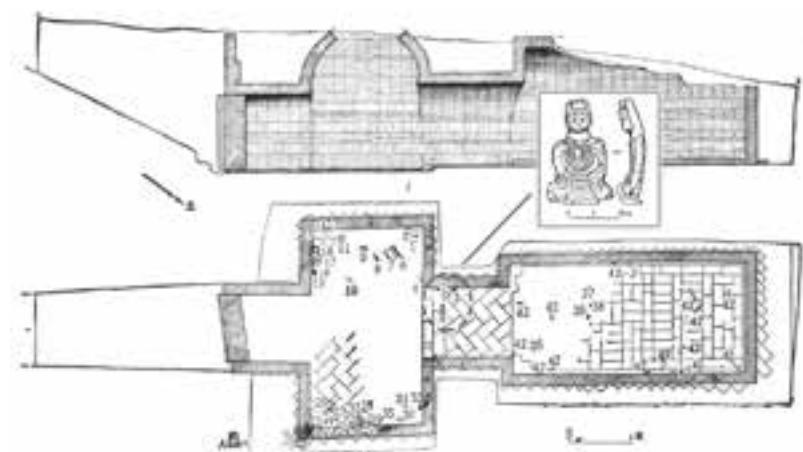


図 9 鄂城塘角頭 4 号墓と釉陶仏像（湖北省文物考古研究所ほか 1996）

もつ双室墓である（図9）。仏像は前室と主室の間の甬道に置かれ、それに近接して2つの俑が一緒に副葬されていた。

後漢時代において、仏教要素は思想的な変化が起こりにくい葬送と関わる場所に現れ、使用する人々の身分も多様である。また、仏像が明器を装飾し、仏教要素が墓の装飾に用いられ、あるいは棺室の入口の前に仏像や浮図祠明器が置かれたのは、鎮墓や魔除けの機能が仏教に期待されたためであろう。これは後漢時代に流行した神仙思想という大きな背景と一致している。

（3）初期金銅仏の影響

後漢金銅仏と造形が類似する仏像装飾は長江中下流域に多く現れた。禪定仏を飾る銅薫爐は3点がある。それぞれ江蘇省句容市で採集されたもの、江蘇省南京市江寧上峰張府倉村から出土したものと和泉市久保惣記念美術館所蔵のものである。いずれも出土状況は不明であるが、仏像の装飾を除けば、後漢時代に流行した銅薫爐とほぼ同じ形態を呈している。句容例の仏像は容器の周囲をめぐる装飾帯の上に坐し、江寧例が短冊形の上に坐している（図10-①）。2～3世紀ころの銅鏡の装飾紋様には仏像、思惟像と天人像があらわされた（図10-②）（黄盼 2021）。また、3世紀後半には禪定仏を装飾紋様として採用する陶磁器が多く現れた（図10-③）。仏像はいずれも通肩に大衣を纏い、禪定印を結び、獅子蓮華座の上に結跏趺坐する。獅子座と蓮華座の組み合わせは西北インドにはほとんど見られない造形であるが、この意匠は後漢金銅仏にすでに現れている。すなわち、後漢金銅仏の造形はさらに南に伝播し、当時の仏像の標準的な造形として受け入れられた。

初期金銅仏は後漢以後にも造形を続けている。特に北宋村2号墓のような禪定坐仏は大量に発見され、そのうち、紀年銘を持つものには後趙建武四年（338）、北魏泰常五年（420）がある（河北省文物研究所ほか 1991）。また、甘肅省涇川の一つの窖藏からは「帰義侯印」銅印とともに仏像が出土した（図11-①）（涇川県文化館、平涼地区博物館 1983）。この「帰義侯印」銅印の造形が趙国の印章と一致することはすでに指摘されており（朱棒 2021）、4世紀前半の製品であることは確実である。日常的に用いられた仏像の制作時期はやや遡る可能性が否定できない。仏像使用者の身分について、『後漢書』百官志には「四夷国王・率衆王・帰義侯・邑長、皆有丞、比郡・県」とあり、帰義

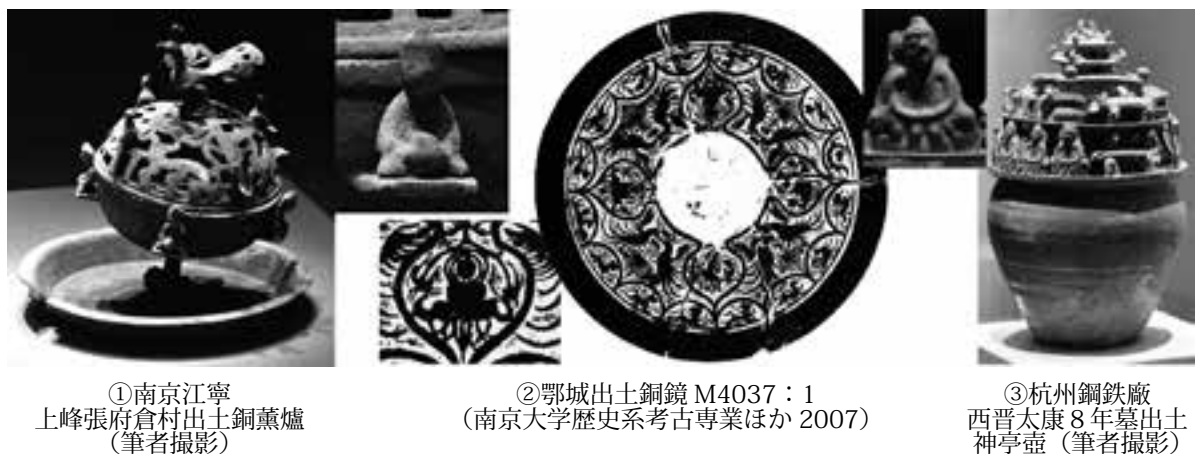


図10 長江中下流域の仏像



図 11 初期金銅仏と北魏金銅仏

侯は郡県と同じ品級である。十六国時期に胡族の政權が他の国王に帰義侯を与えた例がある。例えば『太平御覧』の記載によれば、甘露十二年（370）前涼の君主張天賜を降伏させた前秦の苻堅は、彼に帰義侯を与えたことが知られる。この仏像の使用者は身分の高い胡族の頭領であることがうかがえる。ほかに、カロシューティー文字の銘文を刻んだ例も西安で発見された（韓保全 1998）（図 11-②）。銘文には 2～4 世紀のホータンや楼蘭文書にのみ使われる字母があることから（林梅村 1991）、造像の年代は 4 世紀以前であり、発願者は西域の胡人の可能性が高い。紀年像の銘文によって、後趙建武四年（338）像の発願者は竺氏、すなわちインド人あるいはその後裔である。泰常五年（420）像の発願者は李氏であり、漢人の可能性が高い（図 11-③）。すなわち 2～5 世紀初めには、金銅仏の造形が安定し、使用者の身分や国籍にかかわらず、同じ造形が使われている。

北魏時代、特に太和年間以降、紀年金銅仏像が多く発見され、初期金銅仏と比べると、立体感が失われ、光背・四脚座と像を一体化した像が増え、獅子座は消え、代わりに須弥座や蓮華座が流行した（図 11-④）。5 世紀以降、初期金銅仏の造形が失われていったことは、涼州仏教の繁栄と関係する。5 世紀初めには、承陽二年（426）から太縁二年（436）までの紀年銘を持つ北涼石塔や西秦建弘元年（420）銘がある炳靈寺石窟 169 窟に見られる、偏袒右肩袈裟に代表される涼州造像の様式が形成され、北魏に強い影響を与えた。北魏の早期造像では、河北蔚県出土大平真君五年（444）朱業微造像（蔚県博物館 1989）や雲岡石窟曇曜五窟などがあげられる。しかし、造形の上で、北魏の金銅仏には部分的に初期金銅仏像の特徴が残された。例えば、手の甲を前に向けた禅定印や、対称衣紋の通肩袈裟などがあげられる。2 世紀以上にわたって伝承された初期金銅仏の造形の伝統は強い影響力を保持していたのである。

5. おわりに

中国において、後漢時代から、仏像や仏像紋様が流行する。仏像紋様は2世紀前半にすでに現れ、2世紀後半から3世紀初めの墓から単独の金銅仏が出土した。このような金銅仏は小型で、移動可能である。寺院で供養することや、自宅での供養も可能であり、また隨身仏であった可能性も存在する。いずれにせよ、個人の信仰に用いられた可能性が高い。『後漢書』桓帝紀には「飾芳林而考濯龍之宮、設華蓋以祠浮図・老子」と記されている。祭祀対象としての「浮図」は傘蓋をとまなう金銅仏の可能性が高い。また、後漢末に笮融なる人物が重楼の「浮図祠」を建立した。『三国志』呉書・劉繇伝には「乃大起浮図祠。以銅為人、黄金塗身、衣以錦綵」という記録があり、「浮図祠」の中には金銅仏を安置した可能性が高い。

仏像や仏像装飾を使用する人の身分と階級は多様であり、後漢時代から人々はすでに仏教に対して一定の認識を有していた。また、思想的な変化が起こりにくい葬送関係の場所に仏教要素が出現することから、むしろ人々は仏教を積極的に受け入れていたことがうかがえる。中国初期金銅仏は中国の工匠が外来の原型のもとに鑄造した。後漢金銅仏を仏の造形の基準として、5世紀初めまで安定した造形を保っていたが、涼州仏教の繁栄によって、その造形は徐々に失われていった。それは、2～5世紀における東西方向の交流の実態を反映したものである。

また、中国初期金銅仏は仏教芸術の一部分である。ガンダーラ彫刻は最初に仏塔の装飾として使われ、仏像がいつ独立の礼拝対象となったのかは一つの課題である。2世紀後半から3世紀初めに、中国において初期金銅仏が出現したことは、中国本土がついに仏像を礼拝する段階になったことを示している。これは、インドやガンダーラ地区において仏像信仰が形成された年代に、一つの傍証を与えるものといえよう。

参考文献

- 蔚県博物館 1989「河北蔚県北魏大平真君五年朱業微石造像」『考古』第9期
- 和泉市久保惣記念美術館 1988『特別展示 中国古式金銅仏と中央・東南アジアの金銅仏』
- 何 志国 2007『漢魏揺錢樹初步研究』科学出版社
- 河北省文物管理委員会 1959「石家荘北宋村清理了兩座漢墓」『文物』第1期
- 河北省文物研究所 1987「安平東漢壁画墓發掘簡報」『文物春秋』第21期
- 河北省文物研究所・承德地区文物管理所・隆化県文物管理所 1991「隆化皇姑屯遼北安州及其附近遺跡調査簡報」『文物春秋』第2期
- 河北省文化局文物工作隊 1959『望都二号漢墓』文物出版社
- 蓋 山林 1977『和林格爾漢墓壁画』内蒙古人民出版社
- 韓 保全 1998「長安出土的佉盧文銘鑲金銅造像」『收藏家』第6期
- 涇川県文化館・平涼地区博物館 1983「甘肅涇川県發現一批西秦窖藏文物」『文物資料叢刊』第8輯

- 黄 盼 2019「中国における初期仏塔の概念とその造形についての試論」『仏教藝術』第2号
- 黄 盼 2021「漢晋時期佛像八鳳鏡新論」『文物春秋』第4期
- 湖北省文物考古研究所・鄂州市博物館 1996「湖北鄂州市塘角頭六朝墓」『考古』第11期
- 朱 棒 2021「再論甘肅涇川銅器窖藏出土金銅佛像的年代及相關問題」『美術觀察』第2期
- 曾 昭燭・蔣 寶庚・黎 忠義 1956『沂南古画像石墓發掘報告』文化部文物管理局
- 重慶市文物考古所・宝鷄市考古工作隊・重慶市文物局・豐都県文物管理所 2001「豐都槽房溝墓地發掘報告」『重慶庫区考古報告集』科学出版社
- 襄樊市文物考古研究所 2013「湖北襄樊樊城菜越三国墓發掘報告」『考古學報』第3期
- 浙江省博物館 2018『佛影靈奇一十六国至五代佛教金銅造像』文物出版社
- 陝西省考古研究院 2022「陝西省咸陽成任墓地東漢家族墓發掘簡報」『考古与文物』第1期
- 田辺勝美・前田耕作編 1999『世界美術大全集 東洋編 中央アジア』小学館
- 張 淑敏ほか 2009『山東博興銅佛像藝術』文物出版社
- 唐 長寿 1987「梁山麻浩崖墓研究」『四川文物』第2期
- 内記 理 2016『ガンダーラ彫刻と仏教』京都大学学術出版会
- 南京大学歴史系考古專業・湖北省文物考古研究所・鄂州市博物館 2007『鄂城六朝墓』科学出版社
- 松原三郎 1995『中国仏教彫刻史論』吉川弘文館
- 水野清一 1963「中国仏像の源流」『史林』第46巻第4号
- 俞 偉超 1980「東漢佛教圖像考」『文物』第5期
- 李 建西・邵 安定・宋 俊榮・李 明・趙 占銳 2022「咸陽成任墓地出土東漢金銅佛像科学分析」『考古与文物』第1期
- 林 梅村 1991「A Kharosthī Inscription From Chang'an」『季羨林教授八十華誕紀念論文集(上)』江西人民出版社
- 劉 振東 2015『冥界的秩序—中国古代墓葬制度概論』文物出版社
- Domenico Faccenna 1980 *Butkaral(Swāt Pakistan)1956-1962*, Rome: IsMEO
- Donna Strahan 2010 *Piece-Mold Casting: A Chinese Tradition for Fourth-and Fifth- Century Bronze Buddha Images*
Metropolitan Museum Studies in Art, Science, and Technology 1